

# まんだら通信

第241号 (通巻275号)

平成28年08月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## お盆はご先祖の月

「日本人は襖ふすまを開けて、隣の部屋に行くように、極く自然にあの世に旅立つ。」と、共感をこめて言った人がいます。

明治時代、ギリシャに生まれ、ロンドンの祖母に厳格なキリスト教徒として育てられ、世界を経めぐり、アメリカの新聞記者として来日したラフカディオ・ハーンです。

彼は出雲地方に住みましたが、日の出に拍手を打ち、仏壇を拝み、巨木や巨岩、山や川を敬う人々の姿に感動して、この国を安住の地と決め、小泉節さんと結婚して小泉八雲と名前を改めて、明治二九

年に日本に帰化しました。

古代のギリシャは、その頃のイギリスなどよりも高い文明を持ち、ゼウスを最高の神とし、ヘラ、ポセイドン、アテナなど沢山の神々を信ずる多神教の世界です。その意味では八百万やおよぼすの神々を敬う日本人に、親しみを感じたのではないのでしょうか。

日本へは、中国を経由して仏教や漢字、科挙かきよや奴隷など、色々の制度や考え方が伝えられました。それまで文字を持たなかった日本人にとって、自分の考えを伝える文字は大変便利なものでした。お経は文字通り漢字を並べたまま読んでいますが、漢字を並べただけでは、日本人の細やかな心の裏ひだを言い表すには些か大ざっぱ過ぎましたから「かな」を発明して、仮名交じりで書くようにしました。このことで『枕草子』や『源氏物語』などの世界的文学が生まれましたし、『土佐日記』、『蜻蛉日記』などの日記文学、『徒然草』

『方丈記』などの随筆が生まれました。

何れも、未だに版を重ね続ける、ベストセラーと言っているでしょう。

このことから分かるように、日本人は、自分たちに必要なものは取り入れますが、入ってきたすべてを受け入れたわけではありません。

インド直伝の仏教は、霊魂を認めませんし、キリスト教も同様です。

ところが大方の日本人は、死んだあと、霊魂は『草葉の陰』というように、極く身近なところにいる、盆正月、春秋の彼岸以外にも孫の誕生祝いなど、その家の行事には一緒に祝ってくれる、親しいご先祖さまという考え方を

することをしません。

近ごろ信仰心が薄くなったなどと言われるが、このような思いは皆さん、思い当たるのではないのでしょうか。これは多分一万五千年前の縄文時代始めから変わらない思いだろうと思います。

有名な民俗学者柳田国男は、『先祖の話』で、おおよそこんなことを言っているそうです。

人は死んでも身近な所において、折り目節目の行事以外にも、希望すれば子孫と交流できると考えていること。

そして初七日、四十九日、百か日、一周忌と塔婆を供えて供養することによって、魂は磨き上げられ、五十回忌を過ぎると本当の意味のご先祖になって、子孫に幸福をもたらすようになるのです。

更に哲学者梅原猛さんは、沖縄やアイヌの人たちは、すべての生き物には魂があり、死ぬと人間と同じようにあの世に行く。だから食料とする時は、特に丁重に扱わなければならない、と思っている。と言っているそうです。

それどころか、生きものでない道具にも命があると考えている証拠に、針供養や筆塚を作って私たちは供養します。

折しも今月はお盆の月。迎え火を焚き盆だなをしつらえ、ご馳走を供え、ゆつたりとくつろいでもらいましょう。

## 日本に勝ったのはアメリカだけです

あの戦争が終わって今年は一七一年目だそうですね。ドイツとイタリアが連合軍に降伏したあとは、日本だけが世界中を向こうに回して戦い続けました。

そして負けたのだから、イギリスやフランスなど他の国にも負けた…、そう思っている人が多いようですが、本当でしょうか。

歴史を振り返れば、開戦当初、インドシナ半島のビルマではイギリス軍が、ベトナムではフランスが、インドネシアではオランダが、殆ど戦うことをせずに降伏しました。シナ大陸では日本軍は負け知らずで、敗走する中国軍を蹴散らしていました。

南京で三十万人を虐殺した、などという与太話が出るほどの悠長な作戦ではなかったのです。

日本の降伏が一両日に迫った昭和二〇年八月九日、不可侵条約を一方的に破棄したソ連は、満州や千島列島になだれ込みました。こういうのを火事場泥棒といい、日本人なら恥ずかしくて考えもしないことです。尤も千島列島の守備隊の思いがけない強烈な反撃にこずつて、北海道への上陸ではアメリカに後れを取るといふ大失敗をしかしました。

お陰で、本当に幸いなことに、朝鮮半島やドイツのような「分断国家」にならずに済みました。

不幸中の幸いということで言えば、朝鮮半島を失ったことで、金食いの虫の朝鮮に、莫大な税金を使わなくて良くなりました。また言葉にならない苦労の末に帰国した人たちは、働きに働きましたから、結果的に経済復興の糸口を作りました。

今、増え続ける海外からのお客さんは、日本製品もサービスも世界一と折り紙をつけてくれます。

明治生まれや、私たち昭和生まれに比べて、大正生まれの世代は貧乏くじを引いた人たちじゃないかなと思います。

でも、この世代の皆さんが頑張ってくれたお陰で、アジアやアフリカ、中近東の国々が、我々も日本のようになりたいと目標にしてくれていることを思えば、以て瞑すべしという事ではないでしょうか。

につぼん人情小斬 三遊亭鳳豊  
第一二六話 疎開

先日、オバマ大統領が広島に現役大統領としてはじめてやってきて、原爆死役者慰霊碑に献花をしたあと、演説をしましたね。

私もテレビの生放送で聞いていましたが、オバマ大統領は、「太古の昔から、人類は戦いを繰り返して、そのためにどれだけの人々が犠牲になったのか」という話をしていました。

私も、生意気にも、「いかに人間が動物的で、争うことをやめないか」ということを改めて痛感しました。

でも、オバマさんでよかったですね。トランプだったら、何を言うか、わからないですからね。本当に、あの方が大統領になったら、どうなるんでしょうね。「いやいや、大丈夫だよ。あれは、一種のマジック・シヨーみたいなものだ。名前がトランプだから」なんて、いう人もいらつしやいます、それにしても、トランプさん、まさに「向かうところ、手品師」ですね。

実は、オバマさんの広島訪問の数日後、私は、友人の紹介で、東京の郊外にお住いのある老婦人とお会いしました。実は、その時のお話を聞いて、「え、そうだったの!」と驚いたことがありました。

今日は、その特にお聞きした話をします。お名前を仮に木下敏江さんとしておきます。敏江さんは昭和十年生まれですから、今年八十一歳。ご主人は幸三さん、八十二歳です。敏江さんが話してくれたのは、夫の幸三さんの子供時代の話でした。

幸三さんは、生まれつき、両足が不自由で、それがもとで、普通の小学校に通えず、障害児たちの集まる学校に通学することになりました。

こう書くと、「ああ、そうですか」と今では普通のことに思われがちですが、戦前の日本には、そうした、肢体に障害を持った子供たちのための公立の学校は、全国でただ一校、昭和七年に東京の世田谷に開校した東京都立光明国民学校だけでした。木下幸三さんは、幸い、家がそれほど学校から遠くないところにあつたので、毎朝、お父さんにリアカーに乗せてもらい、その光明国民学校に通っ

ていたそうです。

しかし、やがて、戦争が激しくなり、B29が日本の上空を思うがまま飛ぶようになり、すると、都会の児童たちの「疎開」がはじまりました。

いま、八十代のお年寄りに子供時代のお話をうかがうと、「疎開」の話が出てきますね。都会にいた方は、親せきを頼った縁故疎開か学校全体での集団疎開、また、地方にいらした方は、「疎開っ子」が転入してきた思い出を語ってくれます。あまり楽しかったという思い出は聞けません。ひもじかったり、親元を離れて寂しかったり、不衛生で髪がシラミの巣になったり…。それでも、空襲がないだけ良かったと皆さん、仰います。調べてみたら、東京都の学童疎開は昭和十九年八月四日が第一陣だったそうです。

幸三さんの通っていた光明国民学校の児童たちも、身体の悪い子がたくさんいたのですから、当然、疎開しただろうと思えますね。処が、当時、この光明国民学校のあった世田谷区の三十三の国民学校すべてが長野県や新潟県に疎開したのも関わらず、光明国民学校だけは、疎開することを許されなかったのです。

何故だか分かりますか。私は敏江さんの話を聞いて驚きました。

「私も主人に聞いて、初めて知ったんですけどね…」と、敏江さんはちよつと口をとがらせるようにして、話し始めました。聞けばそもそも「学童疎開」という制度は、将来、兵士として、日本の軍隊をになうであろう子供たちを守るための作戦であつて、同じ学童であっても障害のある子供たちは戦力にならないという理由で、疎開させてくれなかったと言っています。

いまなら考えられない「論理」が、当時は当たり前だったのです。だからといってこのままにしておけない、時の松本保平校長は、最初は、教室に畳を敷き、全員で行動を共にし、空襲警報が鳴れば、校庭に掘った防空壕に全員飛び込み、避難を繰り返しました。

あの昭和二十年三月十日の東京大空襲の夜は

子供たちは校庭から焼ける東京の町を見ていたそうです。

子供たちに迫る危険を感じた松本校長は、一人で疎開地を探しに出かけました。真っ先に向かったのは、東京からの学童疎開を積極的に受け入れてくれた長野県でした。松本校長は、県庁に行き、相談しました。さすが、教育県ですね。

すると、ひよつとしたら上山田村に空きがあるから村長に頼めば何とかなるかもしれないと、密かに教えてくれました。

さっそく訪ねていくと、村長が会ってくれず、追い返されました。その様子で、校長先生は行政にまともに頼んでもダメだと悟りました。だったら、村の人々に直接頼もうと、一軒一軒、旅館を訪ねて宿の主人や女将に平身低頭、「身体の不自由な子供たちのために、お願いします」と頼み続けました。

熱意は通じました。旅館主たちが、たまたま旅館組合長を兼ねていた村長を説得してくれたのです。そして、村長の所有しているホテル、「上山田ホテル」に光明国民学校の学童疎開が決まりました。もちろん、それだけで終わりません。どうやって、長野まで行くかです。校長先生は次に、鉄道局に三日間通いつめ、客車一両を貸し切ってもらい、治療道具一式の運搬も陸軍にお願いしました。そして、昭和二十年五月十五日、幸三さんを含む子供たち五十人と教職員、付き添いの親たちを乗せた列車が上野駅を出発したのです。

敏江さんは、最後に私にこう言いました。「それから十日後だったそうですよ。世田谷が空襲にあつて、学校が全焼したのは、もし、校長先生ががんばってくれなかったら、私は主人とは一生出会うことはなかったんですよ」

ご主人は、戦後、手術で無事に歩けるようになったそうです。

この話、あなたも「え、そうだったの!」と思いませんか?

20万円ぐらいと、少しお高いようですが、散歩や買い物で出来る事を考えれば、安いと言えるのではないのでしょうか。

▼今月の野草はカワラナデシコ【ナデシコ科ナデシコ属】。盆花といってお盆にはなくてはならないという地方もあるとか。棚田の土手などに咲いている姿があります。秋の七草の一つですが、ミソハギやオミナエシなど、人の手が加わって出来た、典型的な里山の野草ですね。人が山に入らなくなって、里山は荒れるにまかせ、林床に日光が届かず、絶滅を危ぶまれる野草です。

2016.08.09 龍渉



から、そのことを、呉々も忘れませんように。

「歳の関係で、故郷のお墓へのお参りが辛くなったので、今のお墓を片づけて、永代供養墓(密厳塔)に引越したいが…」と相談されることがあります。

それも一つの方法ですが、代々お守りしてきたお墓です。お寺が代わりにお守りするという方法もあります。どんなことでもご相談下さい。▼『歩行アシストロボット』という優れものがあるそうです。車いすでは、一人で外出することは難しいのですが、この手押し車は、上り坂や下り坂では使い手の体力にしたがって、力加減をし、GPSで今いるところが分かるので、家の人も安心です。値段が

▼昔のお年寄りのせりふのようですが、この暑さは堪え難いものがあります。人間の身勝手に地球がお灸をすえているのではないのでしょうか。

▼先月初め、孫が突然の急病で、亀田病院に緊急入院しました。そのため、『まんだら通信』7月号はお休みという羽目になりましたが、お陰様で大分良くなり、「もう心配はありません」とお医者さんに言われるまでになりました。

▼ご家族の誰かに万一時は、葬儀屋さんより前にお寺に相談することを忘れないでください。

一昔前までは、隣近所や親戚が相談に乗ってくれましたが、近ごろはそうでもなくなりました。お寺だけは頼りになる相談相手です

余滴